



34 清水南山《置時計》一点

大正十三年（一九二四）
銅・銀・四分一／高彫・象嵌・透彫
二二・五×二六・五×四五・〇

本作は東京美術学校への依頼製作品で、台座に載る時計の概形および加飾は鍛金家・丸尾専太郎と彫金家・清水南山が担当し、台座を漆工家・六角紫水と清水が製作した。時計底面に「大正十三年一月 彫金 清水亀蔵 鐘起 丸尾専太郎」の刻銘、台座底面に「漆技 六角注多良謹作」の刻銘がある。大正十三年の皇太子御成婚を祝して宮内省高等官一同より献上された。

独特の形状は法隆寺の《玉虫厨子》や仏像光背の形状等から着想したものと考えられ、法隆寺や正倉院宝物といった飛鳥く奈良時代の意匠を中心に構成している。清水はこれらのうちほぼ全ての金具を担当しているが、時計下部の四側面に見られる四神が高彫象嵌されている箇所や、時計上部から両横側面にかけての飛雲文の高彫象嵌の手法は、江戸の刀装金工を受け継いだ明治の彫金に通じるものである。このような古代工芸品を作品に引用する製作傾向は、大正時代後半から昭和戦前期に活躍する新しい世代の作品に多く見られる。しかし、本作の場合、明治期の彫金技術を徹底して身に付けた旧世代に当たる清水が製作したことにより、その当時のモダンな引用感覚と明治調の加飾表現が融合され、独特な魅力が発揮されることになったのである。

清水南山（一八七五〜一九四八）は広島に生まれ、明治二十四年（一八九一）に東京美術学校に入学し、加納夏雄および海野勝珉に彫金を学んだ。卒業後、しばらく東京を離れて活動したが、大正七年（一九一八）に司法省が大正天皇へ献上した《金荘螺鈿飾太刀拵》を製作し、翌年東京美術学校教授として迎えられた。昭和九年（一九三四）、彫金家として最後の帝室技芸員に任命された。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

明治の彫金―海野勝珉とその周辺

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 41

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十八年九月二十三日発行

© 2006, The Museum of the Imperial Collections